

卑弥呼の冢の同時代史的認識

門 田 誠 一

序 言

『三国志』魏書東夷伝倭人条（以下では魏志倭人伝）は三世紀代の倭に関する情報が記された貴重な同時代史料であり、これまで膨大な研究が積み重ねられている。ただし、そのほとんどは邪馬台国の位置についての論考であり、自余の内容に関してはさらに研究の深化と展開の余地が大きい。

とりわけ倭人の習俗記事については、魏使による実際の見聞に基づく情報という前提で重視され、これを事実として、考古資料等に対する比定や考察が行われてきた。しかしながら、見聞に基づく記述であったとしても、とくに伝聞の場合は伝え聞いた者の認識によつて内容が規定され、さらには『三国志』の同時代的な教養や思想に基づいた編纂がなされるという、複数次にわたる価値判断や認識の決定段階が想定される。よつて、魏の政治的行為の一部を除いて、とくに倭人伝の習俗記事を考察する場合は記述内容を無批判に受容するのではなく、いったん三国時代を中心とした同時代的な史書・文献や考古学的知見に基づき、編纂された時代の文化や思想・教養を前提として批判的に読解する必要がある。いわば編纂側からの視点であり、本論ではこれに基づいて、できるかぎり近接した同時代の史料・文献や考古資料によりながら、魏志倭人伝に記された卑弥呼の冢の同時代的意味に近づくことを目的とする。

一 卑弥呼の冢に関する諸見解

魏志倭人伝には「卑弥呼以死、大作冢、径百余歩、徇葬者奴婢百余人」とあり、この部分は一般的には、卑弥呼が死亡したときには、大きな冢を作り、それは径百余歩であり、奴婢百余人を殉葬したと解されている。以下にふれるようにこの文章のうち、「以死」の部分は、史書の用例等から卑弥呼が自殺したとする説があるほか、「大作冢」は「大いに冢を作る」とする釈読があり、読みとしてはこれが正鵠を射ていると考える。ただし、その文章の意味は大いに冢を作った結果として大規模な冢を造成したということであろう。

「卑弥呼以死」に関しては中国史書での「以死」の用例の検討から、自然死ではなく、刑死や賜死・諫死・戦死・自死・遭難・殉職・奔命（過労死）・事故死などで、その結果「非業の死を遂げた」ものとする見方や、これに基づいて卑弥呼が自殺したとする説もあるが、本論での対象は同時代の史・資料から事物としての認識が可能である「大作冢、径百余歩」の部分とする。

「大作冢、径百余歩」の部分に関しては、つとに言及があり、たとえばこの「径」の語から喜田貞吉は円墳であると推定した。^③橋本増吉も「径」の語から円墳であり、前方後円墳ではないとし、さらに百余歩とは編者の誇張であり、事実はその十分の程度とみてよいとし、九州を中心とした合口甕棺や箱式棺の封土が相当大きく意識されたために筆録されたものであると説く。^④

笠井新也は河村秀根の『書紀集解』に前方後円墳である箸墓古墳（奈良県桜井市）を「円形之丘」と記している史料があることを引いて、後円部の大きさを示したと推論し、百余歩という表現には誇張もあるとしても、卑弥呼の墓が極めて大規模なものとして魏の使者に伝わったとし、魏の一步は日本の四尺七寸五分（約一四四センチメートル）であるとして、箸墓古墳の後円部直径一五〇メートルであるのとほぼ一致するとして卑弥呼の冢を比定した。^⑤

三品彰英氏は一九七〇年の時点で、これらの見解を整理している。また、「歩」についても言及しており、中国の尺度であり、竹島卓一氏の研究を引いて、魏代の一尺は日本の約七寸九分にあたり、一步は約四尺七寸四分にあたるから、径百歩とは直径約一五〇メートルの大墳墓となるとした。

古田武彦氏は『三国志』のなかの蜀志五・諸葛亮伝の「山に因りて墳を為し、冢は棺を容るるに足る」という記事、及び蜀志一四の「大君公侯の墓が通例『墳』であつた」とする記事を引いて、歴然とした高さのある人工の墓を「墳」と呼び、それよりも規模の小さい盛り土を「冢」と表現したことを記述している。^⑦

森浩一氏は卑弥呼の冢について、はやい時点で高塚古墳ではない可能性を示唆した。また、『周礼』春官宗伯・冢人の鄭玄注に「漢律に曰く、列侯の墳は高さ四丈、関内侯以下庶民に至る各々差あり」とあることから身分による造墓の規制が高さにあるとし、前漢帝陵の高大なことや、『後漢書』礼儀志大喪条の古今注に記された帝陵の規模には高さの記載があることを重視し、卑弥呼の墓を「径百余歩の冢」と記しているのは薄葬が行われていた魏の影響を受けたものとした。^⑧ その後の再論でも墳丘のない円・方形周溝墓や山地形を利用した広義の古墳でも卑弥呼の冢の候補にはなるが、前方後円墳ではないとみて、さほどの盛り土のない古墳を冢という字で表現した可能性を指摘した。^⑨

水野祐氏は「大作冢」とは弥生時代に各地でみられる集団墓の墓域全体を指すものであり、「径百余歩」とは円墳一基の直径と考えるのではなく、丘陵上などに設けられた墓域を示すとした。^⑩

佐伯有清氏は「冢」の字が『三国志』全巻で、わずか四回しか用いられないことに注目し、倭人伝に二回出現する自余の冢に関して、一例は土を盛りあげた「つか」そのものであり（魏志韓伝）、もう一例は明らかに棺を納める墓のことを指すとする（蜀志諸葛亮伝）。このように『三国志』に冢の用例が少ないのは、三国時代の薄葬が盛行し、土を盛りあげた冢とは無縁であつたからであるとする。それに比して、後漢代は厚葬が流行したため、『後

漢書』には「冢」の地、「冢塋」などの語が頻出することを指摘する。また、『後漢書』礼儀志などにみえる後漢代の皇帝陵は「周三百歩」「周百八十三歩」などの記載が多く、これらと比すべくもないが、「徑百余歩」の表現にやや誇張があるとしても、卑弥呼の冢の背景にはかなりの財力・労働力・権力が存在したと推定した。卑弥呼の冢の規模に関しては、一步は六尺であり、魏晋代の一尺は二四・一二センチメートルとして、一步は一四四・七二センチメートルとなり、出土した魏晋代の実物の尺も参照し、「百余歩」はおよそ一四五メートルであるとする。ただし、佐伯氏は、この数値をもとにした実際の墳墓の比定には慎重であり、諸説の紹介にとどめている。⁽¹⁾

宝賀寿男氏は卑弥呼の冢と殉葬に関する近年の見解を整理し、高さ数メートル程度で、径三〇メートル程度の円形または楕円形の墳丘墓で、丘陵部にあまり盛り土をせずに築かれ、内部構造は箱式石棺であったと推定し、北部九州地域の弥生後期・終末期の墳丘墓に比定できることを示唆した。⁽²⁾

専論を中心として、卑弥呼の冢に関する諸説を瞥見してきたが、本論では倭人伝の記述に基づいた単純な墳墓の比定ではなく、冒頭にも記したように、本論では卑弥呼の冢の同時代的意味に近づくことを目的とするために、次に『三国志』編纂に時期的に近い史料・文献と考古資料の検討を行う。

二 史書・文献にみえる冢の規模と関連語句

倭人伝にみえる卑弥呼の冢を同時代的に位置づけるために前後する時期の史書・文献にみえる関連する語句を検討してみたい。先学によって指摘されているように「大作冢」の用例は『三国志』呉書妃嬪伝裴松之注に引く『江表伝』にみえる。すなわち、孫皓は張布の女を美人となして、寵愛したが、その夫人の死に際して、悲しみと思慕の念から、後苑のなかに夫人を葬り、大いに冢を作った。工人たちに命じて柏の木で俑を作らせ、冢の中にそれを入れて墓を守る護衛兵とし、金銀や珍宝を夫人と一緒に葬り、その数は莫大なものであった。葬儀が終わった後、

孫皓は後宮にひきこもって喪に服し、半年も外に姿を見せることがなかった。都の人々は、葬儀が非常に豪華なのを目にして、みな孫皓が死んで葬られたのは彼なのだと考えた。¹³⁾

同様の用法は『後漢書』中山簡王伝に「済南、東海二王に詔して皆会せしむ。大いに為に冢塋を修め、神道を開き、吏人の冢墓を平夷すること千を以て数え、作者は万余人なり」とあり、冢とその塋域を整備し、そこにいたる通路である神道を造成し、その際に属吏や人々の冢墓を平らげて地ならしすること千を数え、それらを行った人夫が一万人余りであったことを述べている。この用法は倭人伝の「大作冢」の語と類似した用法として参照される。加えて、光武帝の子である中山簡王劉焉の墓は冢塋、吏人のそれは冢墓と使い分けている点も注される。

「怪百余歩」に関しては、研究史の項でふれたように尺度の観点からの解釈があるが、前後する時代の文献との比較検討が一義的な方法であり、すでにふれた佐伯有清氏の指摘のように周長と高さという規模に対する記述によって、後漢代の皇帝陵は高大な冢を設けていたと認識されていたことが知られる。

そのうち、『後漢書』本紀の各帝紀李賢注所引帝王世記に曰く及び礼儀志に次のような記述がみえ、その他の記述も同様である。¹⁵⁾

明帝顯節陵―山方三百歩、高八丈

章帝敬陵―山周三百歩、高六丈二尺

和帝慎陵―山方三百八十歩、高十丈

殤帝康陵―山周二百八歩、高五丈五尺

安帝恭陵―山周二百六十歩、高十五丈

順帝憲陵―山方三百歩、高八丈四尺

冲帝懷陵―山方百八十三歩、高四丈六尺

質帝靜陵—山方百三十六步、高五丈五尺

桓帝宣陵—山方三百步、高十二丈

靈帝文陵—山方三百步、高十二丈

これらによると後漢皇帝陵の規模は百歩以上であり、二百歩、三百歩という規模の差があり、百歩を超え、さらに二百歩、三百歩という一定の規範があるようにみうけられる。

いっぽう、後漢皇帝陵は所在地とともに周囲の長さとし高さが記されているのに対し、『漢書』にみえる前漢代の皇帝陵を参照すると、たとえば高帝の長陵は「長安の北四十里に在り」、恵帝の安陵は「長安の北三十五里に在り」、文帝の霸陵は「長安の東南に在り」と注記されていることに典型化されるように、それぞれの位置が示されているのみであつて、周長と高さが記されている後漢代皇帝陵との表記の違いがあることが指摘されている⁽¹⁶⁾。

東洋史の研究からは、後漢代の墳丘規定に関する史料・文献記述の整理があり、さらに後漢代皇帝陵については、近年の村元健一氏による研究があり、後漢皇帝陵の可能性のある墳墓遺構の規模にもふれ、直径ではその最小が八六メートル（朱倉M七〇七）、最大のものが一八五メートル（李家村大冢）であることを示した。また、『周礼』春官家人の鄭玄注に引く『漢律』に「列侯墳高四丈、関内侯以下至庶人各有差」としてみえる社会的階層による墳丘規定などを参照し、後漢代の墳丘高規制について言及するとともに後漢墓皇帝陵の規模は前漢に比べ小型化が顕著であるが、階層ごとに墳丘の高さを規定し、そのことによつて皇帝陵が最大の墓であり続けたと論じている⁽¹⁸⁾。このような研究によつて、後漢代の墳丘高に対する認識が指摘されている。

東晋・南朝陵墓の規模と墳丘に関しては唐・許嵩の撰になる『建康実録』に記述がある。たとえば東晋代の陵墓において、明確に「不起墳」すなわち墳丘をもたないものとして建平陵・崇平陵・高平陵・隆平陵・休平陵があげられている。いっぽう、唯一の墳丘を有する陵墓としては「幕府山之陽」にある穆帝・司馬聃の永平陵があり、

「周四十歩、高一丈六尺」と記されている¹⁹⁾。

この他に『建康実録』にみえる南朝陵墓の墳丘に関する記載としては、宋・武帝劉裕の初寧陵は「周圍三十五歩、高一丈四尺」、宋・文帝劉義隆の長寧陵は「周圍三十五歩、高一丈八尺」、陳・武帝陳霸先の万安陵は「周六十歩、高二丈」、陳・文帝陳蒨の永寧陵は「周四十五歩、高一丈九尺」などがあげられている²⁰⁾。

南朝陵墓に関する実際の墳墓の墳丘の知見としては南京・油坊村大墓が知られ、丘陵上に周長一四一メートル、高さ約一〇メートルの墳丘が存在し、発掘調査によって版築によることがわかっている。封土や磚室の規模、出土遺物の質と量から、報告文では唐代の地理書である『元和郡県志』（八一三年撰）にみえる陳・宣帝の陵墓の可能性が指摘されている²¹⁾。

これらの前後する時代に比して、三国時代の皇帝陵に関しては規模の記述がなく、たとえば曹操の墓について、自らの死の一年半前の建安二三年（二一八）六月に下した令としてよく知られる。そこには墓の立地や規模について、昔の埋葬は必ず瘠薄せきはくの地（瘦せた土地）を選んで行ったものであり、我が墓も西門豹の祠の西ある高地を利用して墓の基礎とし、墓には封土を盛ることをせず、また樹木を植えない、とあり、一般的に魏の薄葬の根拠の一つとされる²²⁾。

これを典型として三国時代には薄葬が主体となり、封土を有する墓が衰退したとされ、研究史でふれたように『三国志』に冢の語が四度しか出現しないということに端的に現れているが、これに比して、後漢代には高大な封土をもった墓が造営されていたことが知られる。それに対して、東晋・南朝代の皇帝陵はやや規模が小さく、実際の遺跡としては封土の確認されない例もあることが知られた。

これらの漢代から南朝にかけての封土の記述と比較してみると、卑弥呼の冢が「徑百余歩」と百の単位で記されている点に関しては、墳丘規制の想定されている後漢代の皇帝陵がすべて周圍百歩以上であり、二百歩前後から三

百歩であると記されていることと、それに比して小規模な東晋・南朝の陵墓は三十五歩から六十歩程度であることを勘案すると、墓の規模の高大であることを示すには百歩を概念的な単位とした認識が魏志倭人伝編纂時点で存在した可能性がある。

これらについて先学の指摘を参照して上述のように検証すると、卑弥呼の冢の記述に用いられた「径百余歩」「徇葬者奴婢百余人」という数字は、大規模な墓の規模の大きさと殉葬者の多さとを示す定型句的な語である可能性をさらに強調することができよう。

そのいつばうで、時期的に前後する後漢代および東晋・南朝の皇帝陵の記述にみられる高さの記述がみられないことは、その事由が後漢代の墳丘の規制かあるいは魏の薄葬意識によるものかの問題は別にして、平面的な規模に対する認識が主体であり、高さの意識が希薄であつて、これは卑弥呼の冢の形状に関する『三国志』の記述として端的に現われている。そこで次項では主として墓の題記や墓碑などの文字を有する考古資料から、冢の語に関する同時代的認識を検討したい。

三 魏晋南北朝期における冢の具体相

冢に関して同時代的に考察するにあたって、まず、倭人伝の卑弥呼の冢の記述に用いられた「大作冢」を構成する「作冢」の用例を検討してみたい。「作冢」の語に関しては、時期的に近い資料として後漢代の墓に関する題記や墓碑にみられる。これらのうち本論に関係する事例にふれておきたい。

とくに注意される事例としては四川省や湖北省重慶一帯の崖墓すなわち崖などに横穴を掘込んで造成し、封土をもたない墓に冢に関連する語句が散見される。⁽²⁴⁾たとえば四川・長寧七個洞画像崖墓群のうち一号墓の門闕(図1-1)の左上方には刻文があり、「喜平元年十月廿□□□□作此冢宜子孫」と記されている。⁽²⁵⁾「喜平元年」は後漢の熹

平元年すなわち一七二年であり、この年に「此冢」すなわちこの崖墓が造られたことが記され、子孫に宜し、という吉祥句で結ばれている。同じく七号墓の墓門外側の上部には「黄是作此冢」で始まる長文の刻文がある。「黄是」は黄氏であり、「此冢」を造った人名が記されている。

四川・楽山の佐孟機造冢題記には「延熹二年三月十日佐孟機為子男造此冢」とある(図1-2)。この墓もやはり崖墓であり、「延熹二年」は後漢の一五九年で、この年に佐孟機が子のために冢を造ったことが記されている。同じく楽山の肖壩崖墓には「永和□年三月一日陳賈德物故作此冢…(後略)」の題記があり、後漢の「永和」年間は一三六―一四一年の間となる。Ⅲ区五二号墓の題記には「建和三年正月廿日造此冢」とあり、建和三年は一四九年である。

重慶・綦江県索恩村崖墓の題記には「延光元年十一月十五日…(中略)…閔宗作石冢百姓明知也」とあり、後漢の延光元年は一二二年にあたる。同じく綦江県文龍郷七拱嘴崖墓の題記には「光和四年三月二日平路元立作冢」などの題記があり、後漢の光和四年は一八一年である。重慶では他にも沙坪壩の重慶工業大学工学院崖墓群の題記に「永寿四年六月十七日昭作此冢」「熹平二年十月十八日造此冢」などがあり、後漢の永寿四年は一五八年、熹平二年は一七三年となる。四川省や重慶の崖墓では題記に「冢」を含む事例が多く、他にも「鄧景達冢」(四川省樂山虎頭灣崖墓・図1-4)などの例が知られている。四川省ではほかに新津県寶山崖墓で「張是冢誌」の題記(図1-3)があり、墓誌のことを冢誌と記しており、墓と冢が同義で用いられている例となる。

これらの刻文からは後漢代には崖墓が「冢」と呼ばれていたことがわかる。このような墓にともなう刻文の例が多くみられる四川省は三国時代には蜀の領域であり、『三国志』編者の陳寿は蜀に出自することが注意される。

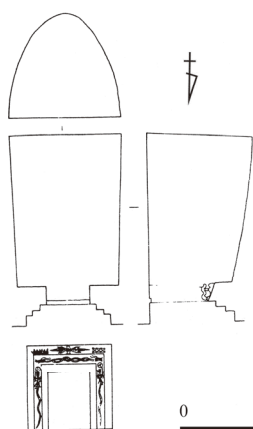
崖墓以外にも、たとえば湖南・長沙涼塘石室墓の墓内の刻文には「書高子延熹五年三月廿八日□作此冢者京州太子作直五万且奇」とあり、銘文の内容の真偽は別として、この「冢」を作った者が京州太子であり、五万の費用を

要し、かつこの墓が奇、すなわち立派であることを記してある。この墓は崖墓ではなく、石室を「此冢」と記してあることから、埋葬施設である墓そのものが冢と呼ばれていたことがわかる。

碑銘のなかにも「冢」「作此冢」などの語がみられ、たとえば河南・南陽浙川県出土の碑のなかに「永初七年冢家長富貴」の文章がある。⁽³⁶⁾ 永初七年は後漢の一三年にあたり、その銘に「冢」とあることから、この資料を含む碑で構築された碑室墓が「冢」と呼ばれていたことが知られる。その他の地域では浙江省の寧波・紹興地域で発見された銘文碑には「永安六年□朱武所可安冢」「永安六年作此冢」などの字句があり、永安六年は三国時代の呉の二六三年にあたる。⁽³⁷⁾ また、浙江・嵊県大塘嶺東呉墓では碑を用いた墓誌が出土しており、これには「太平二年歲在丁丑七月六日建中校尉会稽剡番億作此基冢冢師未垆所処」(図1-5)とあり、造営した工人を「冢師」と表しており、墓そのものが「冢」と呼ばれたことがわかる。「太平二年」は呉の二五七年にあたる。以上のような例によつて後漢代から三国時代には崖墓や碑室墓を含め、封土の有無に関わらず冢と呼んでいることがわかる。⁽³⁸⁾

このような「冢」およびこれと関連する語句の存在から、つとに佐伯有清氏が指摘していたように、後漢代には封土を有する高塚墳墓のほかに崖墓や碑室墓などを冢と認識していたことが知られた。それを示す『三国志』の冢に関する記述としては、すでに研究史の項でふれたように蜀の諸葛亮(孔明)の墓の記述があげられる。すなわち、諸葛亮が自らの死に際して、漢中の定軍山(陝西省漢中市勉県南郊)に葬る事を遺命し、山に因つて墳とし、冢は棺を容れるに足る大ききで、時服にて斂(おさ)め、器物は副葬させなかつたとある。⁽⁴⁰⁾ ここでは冢は棺を入れる空間を主体とした墓と認識されている。

あわせて、『三国志』蜀書にみえる蔣斌に対する鍾会の書信に、西方に到着したならば、尊き大君公侯の墓を仰ぎみて、墳塋を酒掃し、祠を奉じて敬を致(つく)したい、とあり、大君公侯すなわち、蔣斌の父である蔣琬の墓を掃き清め、祭祀を行つて敬意を表す対象を墳塋と呼んでいる。⁽⁴¹⁾



1 四川・長寧七個洞1号墓

延熹三年三月
十日佐益機為
男乃造此冢
九支左右有
八尺當角曰
川與車出

2 四川・樂山佐孟機造冢題記

張良冢誌

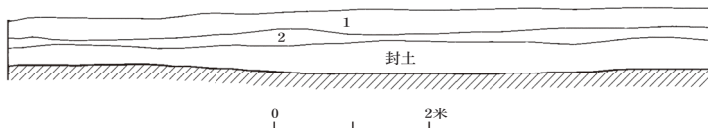
3 四川・新津寶賢山崖墓題記



4 四川・樂山虎頭灣崖墓題記



5 浙江・嵊縣大塘嶺東吳墓志墓誌



6 河南・偃師市閭樓魏墓

図1 「冢」関係崖墓・題記・墓誌銘（1～5）と魏代の封土（6）

おなじく呉書には建衡二年（二七〇）に左夫人であった王氏が死去すると、孫皓は悲しみから、数か月も姿をみせなかったことから、孫皓が死んだという者もあり、孫奮と上虞候の孫奉のどちらかが即位するであろうという風聞があった際に、豫章太守の張俊が、この噂によつて豫章にあった孫奮の母である仲姫の墓の清掃を行ったが、これを聞いた孫皓は張俊を車裂きにし、その一族を皆殺しにするとともに、孫皓とその息子五人を誅殺し、封国は廃止した、とある。ここでは仲姫の「墳塋」と表記されている⁽⁴⁾。

これらを参照するならば、『三国志』では封土を含めた付帯施設を包括した構造物を「墳」、封土のないものも含めて埋葬施設としての狭義の墓そのものを「冢」として一定の区別をしていたと考えられる。

この他にも『三国志』に冢およびこれを含む語は頻出し、本文では一七箇所に見れるが、そのうち、先にふれた諸葛亮の棺を収める空間を主体とした冢の他に構造や規模に関する記述をあげておく。魏書武帝紀には曹操が死ぬ二年前の建安二三年（二一八）に自身の死に対して、葬法を命じている。その例として西門豹祠（戦国時代の魏を強国に導く基礎を築いた伝説的人物）の西原のほとりを寿陵とし、高きによつて盛り土をせず、樹も植えなかった、とした。その典故として『周礼』春官宗伯によつて、冢人が君主の墓地を管理し、すべて諸侯の墓を王陵の両側前方に置き、卿・大夫の墓を後方に置いたとし、漢の制度も同様で、それを陪陵と呼んだのであり、公卿・大臣・將軍のうち功有る者の墓を寿陵に随従せしめるべきであり、したがって、それらを十分に包含しうるように兆域を廣大にせよ、と命じている⁽⁵⁾。この令によつて曹操の墓域に対する認識が示されているが、ここでは冢人は墓を管理する職掌であり、冢は墓を指すことに着目しておきたい。

曹操が孫権征討から帰還した後、張遼に楽進・李典らとともに七千人余りを率いさせて合肥に駐屯し、張遼が孫権を攻撃した際の記述として、孫権は大いに驚いて、なす所を知らず、走つて高冢に登り、長戟を以つて自らを守つたとある⁽⁶⁾。ここにみえる高冢の具体的な高さは不明であるが、既述の用例から冢は墓を指すから、高冢は一定の

高さをもち、そのなかでも特段に高いものを指したことがわかる。また、東夷伝のなかで韓の住居の描写として、草屋根の土室を作り、その外形は家のようであり、戸は屋根の所にあり、一家の全てが土室のなかで暮らし、長幼男女の区別がない、という記述がある⁽¹⁵⁾。

これらの記述によつて、『三国志』において家は墓そのものを指すが、それを基本とするがために、ことさらに一定の高さのある墓をいう場合もあり、とりわけ高いものは高冢と呼んだことがわかる。このような『三国志』における冢の用法の淵源は古典にみえる冢であり、たとえば『詩経』小雅・十月に天変地異の表現として「百川沸騰し、山冢萃（ことごと）く崩れる。高岸谷と為り、深谷陵と為る」とあり、⁽¹⁶⁾『毛伝』に「山頂曰冢」と解説されていることなどから、元来は山頂を指し、これが転じて『史記』では項羽が始皇帝陵を暴いた記述で「項羽秦の宮室を焼き、皇帝冢を掘り始める」として用いられるように、墳墓を指すようになったとされる。⁽¹⁷⁾ いっぽう、『礼記』壇弓上に孔子の言として「吾聞く、古は墓して墳せず」とあり、⁽¹⁸⁾鄭玄の注には「土の高きは墳という」とあるように墳は墓の盛り土の高さを指す。⁽¹⁹⁾

以上『三国志』などの用例によるならば、「径余百步」とのみ記され、高さの記載がない卑弥呼の冢も付帯施設を含め、高大な封土を有する墳ではなく、魏志倭人伝編纂時点においては棺などを埋置する狭義の埋葬施設を包摂する墓壇などの空間を主体とした墓としての冢の認識が存在したと推定される。

論旨に必要な範囲で前漢から三国時代における規模と形態の変化について、現状の知見を整理しておく。前漢代の皇帝陵はボーリング調査が行われ、⁽²⁰⁾一部に対して（杜陵、陽陵）は発掘調査もなされているが、墳丘規模に関しては諸書で一致をみないことが多い。概して前漢皇帝陵は高大な覆斗形（截頭方錐形）の封土を有し、実際に測量調査を経た高祖長陵を参照すると東西長が約一六〇メートル、南北長が約一三四メートル、高さ約三〇メートルとされている。⁽²¹⁾ また、前漢皇帝陵のなかで最大とされる茂陵では最長の一辺が約二四三メートル、高さは四八・五メ

ートルとされる。⁵²⁾

ただし、実証的な調査と研究をもとに後漢代皇帝陵は未だ比定の課題が多く、光武帝の原陵ですら現比定地に疑義が示されており、それを踏まえて墳形や規模に対する調査・研究がなされている。現在の研究では前漢代の覆斗形から後漢代には平面円形になると考えられており、皇帝陵比定地ではおおむね径九五―一三八メートル、高さは一六―三六メートルであり、径が最大の愼陵は径一三八メートル、もっとも高さのある恭陵では三六メートルで、その他では康陵・懷陵・静陵は径が五〇―七六メートル、高さが一一―一三メートルとされている。⁵³⁾ このように後漢皇帝陵は前漢皇帝陵に比すと封土の規模は縮小するが、引き続き高大な封土を造営していた。

いっぽう、発掘された三国時代の墓においても封土のある例は稀少であり、墳丘測量図が伴わない報告がほとんどではあるが、東呉・朱然墓⁵⁴⁾（安徽省馬鞍山市・一九五五年に削平、残存封土高約二五センチメートル、径は不詳）、安徽・馬鞍山佳山東呉墓⁵⁵⁾（封土は存在したが近年の削平により規模不詳）、安徽・馬鞍山宋山東呉墓⁵⁶⁾（封土は截頭方錐形で辺長二八×一四メートル、高さ三・五メートル、封土の図はなし）、四川・巴県白市駅蜀漢墓⁵⁷⁾（封土は存在したが近年の削平により規模不詳）、河南・偃師市閭樓魏墓⁵⁸⁾（復原封土は最大径二八メートル、削平により高さは不明・図1―6）などがあり、近年発見された魏・曹操墓も封土は存在しなかった。⁵⁹⁾ このうち宋山東呉墓の被葬者は東呉の景帝・孫休の可能性が示されており、そうであるならば三国呉の皇帝陵の規模が知られる例となる。事例としては稀少であるにしろ、三国時代においても封土を有する墓はみられ、発掘調査で明らかになっている例として、すでにふれた朱然墓は長さ九・五メートルに及ぶ磚室墓であり、青磁・陶器・漆器・銅器など一四〇個体の副葬品とともに六〇〇枚余りの銅銭が出土したことによって、三国時代における厚葬の事例であり、さらには葬送における奢侈の典型とされる。⁶¹⁾

このような厚葬に対して、端的な薄葬の徴証としては封土・闕などの地上の施設がなく、そのために冢の上に樹

木を植えることをせず、副葬明器も少なく、喪の期間を短くして、墓に伴う碑なども禁止される。⁽⁶²⁾これらの点からも三国時代とくに魏においては曹操墓に象徴されるように薄葬が主体となり、この傾向は西晋代になるとより顕著になっていくとみられている。⁽⁶³⁾以上の点から、『三国志』編纂時期には卑弥呼の冢に対しては、封土を含めた付帯施設のない埋葬施設としての墓として記述されていたという同時代的認識を示した。

四 卑弥呼の冢の同時代史的意味

卑弥呼の冢を「百余歩」と記述した背景として、すでにふれたように後漢代の皇帝陵が二百歩あるいは三百歩という大きさであることから、百歩を単位とし、あるいは百歩以上が大規模な墓とされていたことが編纂者の意識の基底にあったと推定される。この点に関しては、東晋・南朝の皇帝陵がいずれも四十歩から六十歩と記され、はるかに百歩を下回ることからみても、卑弥呼の冢の「百余歩」という記述は当該の時期においては相当に大きいことから、大規模な封土を有し、厚葬が盛行した後漢代の墳墓に対する相関的な認識からなされた記述であろう。同時期における数値に関する認識の一端を示すものとして、『三国志』魏書国淵伝には曹操の軍が賊軍を破った場合、報告する上奏文では数を一〇倍に誇張して報告するのが、この時代の通例であることが記されており、国淵は実数を上奏したことによって、曹操は大いに悦び、彼を魏郡太守にした、とある。⁽⁶⁴⁾このような意識が冢などにも敷衍されているかは確実ではないが、一連の文章に「殉葬者奴婢百余人」とあるように百という字句は数量の大きさを示すための象徴的な語であり、「百余歩」の記述も同様の定型句的な意味があったと推断される。

同様の用例として「百余人」という殉葬者の数に関しては、匈奴の殉葬の記述が参考になる。すなわち、『史記』『漢書』の匈奴伝に「近幸の臣妾」が「数十、百人」殉葬されたという記述があり、また『三国志』東夷伝夫余条や『後漢書』夫余伝の殉葬者が「百数」であると記されていることによって、百を単位として数量の多さを抽象的

に示す定型句的な用例とみられる。そして、卑弥呼の冢の規模と葬送に際する奴婢の殉葬に関して、それぞれ「百余歩」「百余人」と重ねて用いられていることから、多数であることを定型句として一般のおよび抽象的に示すために用いられていると考えられる。

いっぽうで魏志倭人伝にみえる習俗として、「其死有棺無槨、封土作冢」とあり、倭人の葬送には封土すなわち盛り土を行って冢を造営していたと記されている。これに関しては『三国志』において「墳」と「冢」の語が選択的に用いられており、すでにふれた「山に因つて墳とし、冢は棺を容れるに足る大きさ」という死に際する諸葛亮の語に象徴されるように「冢」が狭義には墓そのものを指し示すことを勘案すると整合的に理解される。実際の考古資料としても同様の用法は後漢代の崖墓や磚室墓などの題記に「作冢」などとしてみられ、これらの史書や題記から、後漢から三国時代には崖墓や磚室墓などを含め封土の有無に関わらず「冢」と認識されていたことが知られた。そのうち崖墓の事例は四川省・湖北省が中心であって、この地は三国時代には蜀の領域であり、『三国志』編者の陳寿は蜀に出自することから、封土のない墓も含めて冢と理解していたと考えてよからう。

卑弥呼の墓の記述とは別に倭人一般の葬送習俗として記された「其死有棺無槨、封土作冢」という部分は「その死に棺あるも槨無し、土を封じて冢と作（な）す」と釈読され、ここまで述べてきた「冢」の語の同時代的認識によって倭人伝の関連部分を解すると、死に際して、棺はあるが槨はなく、土を封じて、とあることから、倭人の墓は一定の盛土をしていたのであり、大規模な封土ではないため当然ながらこれは「墳」ではなく、諸葛亮伝にみえるような棺を収めるための狭義の墓としての意味の冢としていたのであろう。

実際に卑弥呼の冢は「徑百余歩」とあり、平面的な大きさに関する記述はあるものの高さに関する記述はなく、これが上述のような倭における墓に対する認識の一端を示しているとするならば、冢そのものは必ずしも高大な封土を備えているという認識はなされていなかったと考えられる。

いっぽうで卑弥呼の墓が高大な封土をもたない冢として認識されていたとしても、『周礼』家人には「爵等を以て丘封の度と為す」とあり、『礼記』月令に「棺槨の厚薄、塋丘壟の大小高卑、厚薄の度、貴賤の等級を審らかにす」とある⁽⁶⁸⁾。すでにふれたように『周礼』春官宗伯・家人の鄭玄注には「漢律に曰く、列侯の墳は高さ四丈、関内侯以下庶民に至る各々差あり」と述べられている。また、『後漢書』皇后紀上・明德馬皇后紀に太后の葬送において、当初は墳丘がやや高かったため、兄廖らに即時墳丘を削らせた、とある⁽⁶⁹⁾。いっぽう、後漢・王符の『潜夫論』卷三・浮侈篇には「明帝の時、桑民攢陽侯、冢の制に過ぐるに坐し、髡削せらる」とあり⁽⁷⁰⁾、冢の制があり、これを超えると髪を剃られる刑に処されたことがわかる。このような記述に示されるように棺槨の厚さや塋域や墳丘・封土の大小や高低、厚葬と薄葬の度合いなどは身分や階層の貴賤の等級の基準とされ、それには一定の規制があったことなどが知られる。これらを参照するならば、「徑百余歩」という規模は卑弥呼の墓が一般の倭人の墓との対比において高位階層であること相対的に示している。その前提として『三国志』編纂時点の同時代的認識において、倭人の墓の記述は棺槨や封土という厚葬の規範から記述されており、そのなかで冢の規模によって一定の身分・階層が意識されていることが重要である。

以上の点から、『三国志』編纂時点では衰退していた厚葬が倭においては一定程度行われていたという認識を構成する要素として、倭人一般の葬送習俗である「封土作冢」と卑弥呼の冢が「大作冢、徑百余歩、徇葬者奴婢百余人」であるという記述は互いに整合性をもつ内容として記述されていることこそが重要なのであり、これは墓を通して、倭の社会階層の一面を述べるとともに陳寿の倭に対する編纂姿勢と認識を顕示するものといえよう。

これらの点から卑弥呼の冢の数値のみから単純に墳墓を復原し、あるいは比定することは、倭人伝に対する本来的な編纂内容とは次元を異にするものであつて、平面形が円形系統の相当程度大規模な墓であるが、高さに関する記述はないことから、少なくとも高大な封土をもった墓とは考えられていなかったと推定される。その一方で、

縷々述べてきた墳丘や封土に関する意識の変容のなかで、高大な封土を有さない墓が主流であった三国時代において、「径百余歩」という規模によつて、墓主である卑弥呼の倭における相対的な身分・階層に対する認識が示されていたと把握することが、『三国志』編纂における同時代史的認識として重要であろう。

結 語

本論では倭人伝に記された卑弥呼の冢に関して、時期的に前後する史書・文献や考古資料を用いて、『三国志』編纂時点での同時代的な認識を復元的に考察した。文末にあたつて、行論にそつて論旨を整理することによつて結論にかえることとした。

まず最初に卑弥呼の冢に関するこれまでの見解を整理し、平面形が円形であるという見方が主流であるが、前方後円墳である箸墓古墳の後円部とする説や一基の墓ではなく、複数の墓を配置した墓域を示すとする説もあることを示した。また、これまでも高さの表記がない点に関しても着目されており、この点から高塚古墳とは考えない説がある、また、魏で行われた薄葬思想が背景にあることが指摘されており、『三国志』編纂当時の同時代的認識によつて卑弥呼の冢を再検討する本論の立脚点を相対的に示した。

次に魏晋南北朝期の墳墓に関する史書・文献にみえる冢の規模と内容について検討し、卑弥呼の葬送に関しては、「径百余歩」とあるように、冢の規模とあわせて殉葬者が百を単位として表されており、先学の指摘を分析的に検証してみると、卑弥呼の冢の記述に用いられた「径百余歩」「殉葬者奴婢百余人」という数字は、大規模な墓の規模の大きさと殉葬者の多さとを示す定型句的な語である可能性を示した。いっぽうで、時期的に前後する後漢代および東晋・南朝の皇帝陵の記述に高さの記述がみられないことは、平面的な規模に比して、高さを意識していないという、卑弥呼の冢の形状に関する『三国志』の認識が端的に示されているものと解した。

これに基づいて魏晉南北朝期における冢について、同時代の冢の語の用例・用法を検討し、とくに後漢代を中心とした崖墓や磚室墓に記された題記などから、これらを冢と呼ぶことがあり、また、先行研究でも示されているように『三国志』にも埋葬空間を中心として墓を「冢」と認識する場合があり、封土を含む付属施設である「墳塋」などと区別されていることを確認した。あわせて『三国志』において冢は平面的な広がりの意味が主体となるためことさらに一定の高さを示す場合があり、とりわけ高いものを高冢として示していることを示した。さらに封土のない崖墓などを「冢」と記した題記は蜀の故地である四川省に分布し、蜀は陳寿の出身地でもあることから、封土の有無に関わらず墓を「冢」をすることは『三国志』の同時代的認識であると考えた。

あわせて、漢代墳墓の高大な墳丘と発掘調査によって知られた三国時代の封土墓とを参照して、三国時代には封土が縮小する傾向にあり、これは当時の風潮であった薄葬が背景にあるとし、『三国志』編纂時期には卑弥呼の冢に対しては、大規模な封土を中心とした付帯施設は有さない墓として記述されていたという同時代的認識を証した。卑弥呼の冢に関する記述としては後漢代の皇帝陵が二百歩あるいは三百歩という大きさであることから、百歩を一定の規範とし、あるいは百歩以上が大規模な墓とされていたことが編纂者の意識の基底にあったと推定し、これは大規模に封土を備え、厚葬が盛行した漢代の墳墓に対する認識からなされた記述であろう。

いっぽうでは、魏志倭人伝にみえる倭人の習俗として、「其死有棺無槨、封土作冢」とあることと卑弥呼の冢が「大作冢、径百余歩、徇葬者奴婢百余人」であるという記述は互いに矛盾せず、整合性をもつ内容として記述されていることが重要なのであり、これは倭に関する編纂姿勢を示している。

このように倭人の葬送習俗は『三国志』編纂時点からみると封土のある点では一定の厚葬であったが、棺はあるが槨はない、とされているように、漢代以前の皇帝や諸侯の墓のように徹底した厚葬とは異なる点があることも意識されている。このように倭人の墓の記述は棺槨や封土という厚葬の規範から記述されていることが重要である。

以上の点から、魏志倭人伝の倭人の墓が棺はあるが、槨はなく、土を封じて冢としたという記述と卑弥呼の墓の径が一〇〇余歩という大きさや殉葬者一〇〇余人という点からは、魏志倭人伝の数値のみから単純に墳墓を復原し、あるいは比定することは本来的な編纂時点の認識とは次元を異にするものであつて、倭の葬送習俗は一定の厚葬ではあるが、一般的な倭人の墓との相対において、平面形が円形系統の相当程度大規模な墓として記述されており、それは相対において卑弥呼の階層や身分を示す意味があつたとみることが『三国志』編纂時点における同時代的な認識としては妥当と考える。

註

- (1) 岡本健一「卑弥呼の冢と鏡」石野博信ほか(『三角縁神獸鏡・邪馬台国・倭国』(新泉社、二〇〇六年)
- (2) 森浩一「倭人伝を読み直す」(筑摩書房、二〇一〇年)一五八～一六一頁
- (3) 喜田貞吉「漢籍に見えたる倭人記事の解釈」(『歴史地理』三〇・三、五、六、一九一七年)
- (4) 橋本増吉『改訂増補東洋史上より観たる日本上古史研究』(東洋文庫、一九五六年)四〇九～四三六頁(改訂前の原本は一九三二年刊)
- (5) 笠井新也「卑弥呼の冢墓と箸墓」(『考古学雑誌』三二・一七、一九四二年)
- (6) 三品彰英編著『邪馬台国研究総覧』(創元社、一九七〇年)一四四～一四六頁
- 竹島卓一「支那古代の尺度に関する一考察」(『建築史』二一・一、一九四〇年)
- (7) 古田武彦「邪馬壹国と冢」(『歴史と人物』一九七六年九月号)
- (8) 森浩一「古墳と墳墓の用語について―卑弥呼の冢の解釈の前提として―」森浩一著作集編集委員会編『倭人伝と考古学』森浩一著作集4(新泉社、二〇一六年)[初出は一九六五年]
- 「卑弥呼の冢」(上田正昭ほか編『ゼミナール日本古代史―邪馬臺国を中心に―』光文社、一九七九年)
- (9) 森浩一『考古学と古代日本』(中央公論社、一九九四年)四三一～二頁
- (10) 水野祐『評釈魏志倭人伝』(雄山閣出版、一九八七年)五六四～五六七頁
- (11) 佐伯有清『魏志倭人伝を読む』下(吉川弘文館、二〇〇〇年)一六三～一七〇頁
- (12) 宝賀寿男「卑弥呼の冢」(『古代史の海』二五、二〇〇一年)
- (13) 『三国志』卷五〇・呉書五・妃嬪伝第五／孫和何姫裴松之注所引『江表伝』

会夫人死、皓哀愍思念、葬于苑中、大作冢、使工匠刻柏作木人、内冢中以為兵衛、以金銀珍玩之物送葬、不可称計。已葬之後、皓治喪於内、半年不出。国人見葬太奢麗、皆謂皓已死、所葬者是也。

(14) 『後漢書』光武十王列伝・中山簡王焉

詔济南、東海二王皆会。大為修冢塋、開神道、平夷吏人冢墓以千數、作者万余人。

(15) 下記論考には『統漢書』礼儀志注所引の『古今注』

『帝王世記』及び『後漢書』本紀注などにみえる後漢皇帝陵の規模が整理されており、参照されたい。

村元健一「後漢皇帝陵の造営」『漢魏南北朝時代の都城と陵墓の研究』（汲古書院、二〇一六年）

(16) 佐伯有清『魏志倭人伝を読む』下（前掲注11）一六七～一六九頁

(17) 鶴間和幸「漢律における墳丘規定について」（『東洋文化』六〇、一九八〇年）

(18) 村元健一「後漢皇帝陵の造営」『漢魏南北朝時代の都城と陵墓の研究』（前掲注15）

(19) 穆帝の永平陵の比定地としては幕府山二号墓があげられており、発掘調査時には磚室墓の上部が欠失するほどの盗掘による破壊があったため確実ではないが、大規模な封土は確認されていない。ただし、近傍にある造営時期の近いとされる一号墓では平面形は不明であるが、高さ約三メートルの封土が残っていたことから、二号墓も封土の存在した可能性がある。以上の事実報告は華東文物工作隊「南京幕府山六朝墓清理簡報」（『文物參考資

料』一九五六年第六期）（中国語文献）

(20) 中国歴代の尺度については諸説があるが、研究史の項でふれたように身体尺である歩は通説的には六尺であるとされ、三国時代の一尺を二四センチメートル前後とすると、一步は六尺で約一・四五メートルとなる。ただし、『建康実録』は唐代の撰であり、同時代的な尺度の認識があるとするれば、唐代の一步とされる一五六メートル、一尺は二九センチメートルをあて、東晋・南朝の陵墓に試みにこれを適用すると、東晋・永平陵は周囲約六二メートル余り、直径は一八・五メートル、高さは約四・七メートルとなる。

なお、『建康実録』の記述を含めた史書・文献にみえる東晋・南朝皇帝陵と発掘調査による知見および皇帝陵の比定に関しては下記論考に整理されている。

(21) 村元健一「東晋南朝の皇帝陵の変遷」（前掲注15）

(22) 羅宗真「南京西善橋油坊村南朝大墓の発掘」（『考古』一九六三年第六期）（中国語文献）

(23) 『三国志』卷一・魏書一・武帝曹操紀第一

（建安二三年）六月、令曰古之葬者、必居瘠薄之地。其規西門豹祠西原上為寿陵、因高為基、不封不樹。

(24) 吉川忠夫「薄葬の思想」（『思想』八二八、一九九三年）

李樂民「三国時期薄葬風俗論述」（『史学月刊』二〇〇二年第一〇期）（中国語文献）

李梅田「曹魏薄葬考」（『中原文物』二〇一〇年第四期）（中国語文献）

- (24) 謝凌「四川地区現存主要銘文石刻及其芸術特色」(『四川文物』二〇〇〇年第四期)(中国語文献)
- 歐陽摩一「漢画像石文字相關問題論析」(『四川文物』二〇〇一年第一期)(中国語文献)
- (25) 四川大学考古專業七八級實習隊・長寧県文化館「四川長寧『七個洞』東漢紀年画像崖墓」(『考古与文物』一九八五年第五期)(中国語文献)
- 牛天偉「四川長寧『七個洞』崖墓画像考弁」(『考古』二〇〇一年第一期)(中国語文献)
- (26) 田中東竹「漢碑」古典の新技法3(二)玄社、一九九八年)その後、この墓は再調査され、題記が再解説され、以下の文献に採録されており、本論の釈読もこれによった。
- 高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(四川大学出版社、一九九〇年)(中国語文献)
- 周俊麒「梁山東漢崖墓石刻文字考」(『四川文物』二〇〇一年第四期)(中国語文献)
- (27) 高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(前掲注26)
- (28) 周俊麒「梁山東漢崖墓石刻文字考」(前掲注26)
- (29) 高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(前掲注26)
- (30) 高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(四川大学出版社、一九九〇年)(中国語文献)
- 謝凌「四川地区現存主要銘文石刻及其芸術特色」(前掲注34)
- 馬煒「重慶綦江漢代題刻考述」(『重慶教育学院学报』二五・三、二〇一二年)(中国語文献)
- (31) 高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(前掲注26)
- (32) 高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(前掲注26)
- (33) 高文・高成剛編『四川歴代碑刻』(前掲注26)
- (34) 陳寿の出自・来歴については下記を参照した。
津田資久「陳寿伝の研究」(『北大史学』四一、二〇〇一年)
- なお、陳寿の出自について、『晋書』陳寿伝・『華陽國志』では巴西安漢、『三国志』譙周伝(譙周は陳寿の師)巴西西充国とし、いずれも現在の四川省南充市域にあり、金城崖墓群・嘉陵区後漢崖墓などの後漢代の崖墓が存在する。
- 羅二虎「四川崖墓初步研究」(『考古学報』一九八八年第四期)(中国語文献)
- (35) 歐陽摩一「漢画像石文字相關問題論析」(前掲注24)
- (36) 王峰「南陽東漢磚文字」(『南都学壇(人文社会科学学报)』三三・二、二〇一三年)(中国語文献)
- (37) 王結華「寧紹平原六朝磚銘文分類解説」(『南方文物』二〇〇八年第四期)(中国語文献)
- (38) 嵎県文管会「浙江嵎県大塘嶺東呉墓」(『考古』一九九一年第三期)(中国語文献)
- (39) 佐伯有清「魏志倭人伝を読む」下(前掲注11) 一六三〜一七〇頁
- (40) 『三国志』卷三五・蜀書五・諸葛亮伝第五
亮遺命葬漢中定軍山、因山為墳、冢足容棺、斂以時服、不須器物。
- (41) 『三国志』卷四四・蜀書一四・蔣琬費禕姜維伝第一

四・蔣琬 子斌

西到、欲奉瞻尊大君公侯墓、當洒掃墳塋、奉祠致敬。

(42) 『三國志』 吳書卷五九・吳書一四・吳主五子伝第一

四・孫奮

建衡二年、孫皓左夫人王氏卒。：(中略)：數月不出、

由是民間或謂皓死、訛言奮與上虞侯奉當有立者。奮母仲

姬墓在豫章、豫章太守張俊疑其或然、掃除墳塋。皓聞之、

車裂俊、夷三族、誅奮及其五子、国除。

(43) 『三國志』 卷一・魏書一・武帝紀第一

豹祠西原上為寿陵、因高為基、不封不樹。周礼冢人掌公

墓之地、凡諸侯居左右以前、卿大夫居後、漢制亦謂之陪

陵。其公卿大臣列将有功者、宜陪寿陵、其広為兆域、使

足相容。

(44) 『三國志』 卷一七・魏書一七・張樂于張徐伝第一七・

張遼

權大驚、衆不知所為、走登高冢、以長戟自守。

(45) 『三國志』 卷三〇・魏書三〇・烏丸鮮卑東夷伝第三

〇・東夷／韓

居処作草屋土室、形如冢、其戸在上、举家共在中、無長

幼男女之別。

(46) 『詩経』 小雅

十月：(中略)：百川沸騰、山冢崒崩。高岸為谷、深谷

為陵。

(47) 王作新「墳塋詞」及其文化意義」(遼寧大學學報」

一九九二年第六期)〔中国語文獻〕

(48) 『礼記』 壇弓下

吾聞之古也墓而不墳：(後略)

(49) 王作新「墳塋詞」及其文化意義」(前掲注47)

(50) 咸陽市文物考古研究所編著『西漢帝陵鑽探調查報告』

(文物出版社、二〇一〇年)〔中国語文獻〕

(51) 焦南峰「秦、西漢帝王陵封土研究の新認識」(『文物』

二〇一二年第一二期)〔中国語文獻〕

(52) 陝西省考古研究院・咸陽市文物考古研究所・茂陵博物

館「漢武帝茂陵考古調査、勘探簡報」(『考古与文物』二

〇一一年第二期)

(53) 韓国河「東漢帝陵有関問題的探討」(『考古与文物』二

〇〇七年第五期)〔中国語文獻〕

なお、調査による皇帝陵比定地の規模に關しては、村元

健一「後漢皇帝陵の造営」『漢魏南北朝時代の都城と陵

墓の研究』(前掲注15)に整理されている。

(54) 安徽省文物考古研究所・馬鞍山市文化局「安徽馬鞍山

東吳朱然墓發掘簡報」(『文物』一九八六年第三期)〔中

国語文獻〕

(55) 安徽省文物考古研究所「安徽馬鞍山佳山東吳墓清理簡

報」(『考古』一九八六年第五期)〔中国語文獻〕

(56) 安徽省文物考古研究所・馬鞍山市文物管理所「安徽馬

鞍山宋山東吳墓發掘簡報」(『江漢考古』一〇五、二〇〇

七年)〔中国語文獻〕

栗中斌「馬鞍山市宋山墓年代和墓主身份考」(『東南文

化』二〇〇七年第四期)〔中国語文獻〕

(57) 李国良「巴鼎白市駅発現蜀漢墓」(『四川文物』一九九

四年第五期)〔中国語文獻〕

- (58) 洛陽市第二文物工作隊・偃師文物局「河南偃師市閭樓漢魏封土墓」(『考古』二〇一一年第二期)〔中国語文献〕
- (59) 河南省文物考古研究所編著『曹操高陵』(中国社会科
学出版社、二〇一六年)〔中国語文献〕
- (60) 安徽省文物考古研究所・馬鞍山市文物管理所「安徽馬
鞍山宋山東吳墓發掘簡報」(前掲注54)
- (61) 栗中斌「馬鞍山市宋山墓年代和墓主身份考」(前掲注56)
- (61) 陳穎「三国時期的薄葬与厚葬」(『成都大学学报』〔社科
版〕二〇〇九年第六期)〔中国語文献〕
- (62) 楊泓「談中国漢唐之間葬俗的演變」(『文物』一九九九
年第一〇期)〔中国語文献〕
- 韓國河・朱津「三国時期墓葬特征述論」(『中原文物』二
〇一〇年第六期)〔中国語文献〕
- 李梅田「曹魏薄葬考」(『中原文物』二〇一〇年第四期)
〔中国語文献〕
- (63) 韓國河・朱津「三国時期墓葬特征述論」(前掲注67)
- (64) 『三国志』卷一一・魏書一一・袁張涼国田王邴管伝第
一一・国淵
- 破賊文書、旧以一為十、及淵上首級、如其実数。太祖問
其故、淵曰夫征討外寇、多其斬獲之数者、欲以大武功、
且示民聽也。河間在封域之内、銀等叛逆、雖克捷有功、
- (65) 淵竊恥之。太祖大悅、遷魏郡太守。
- (65) 『史記』卷一〇一・匈奴伝第五〇
- 其送死、有棺槨金銀衣裳、而無封樹喪服、近幸臣妾從死
者、多至数千百人。
- 『漢書』漢書卷九四上・匈奴伝第六四上
- 其送死、有棺槨金銀衣裳、而無封樹喪服、近幸臣妾從死
者、多至数十百人。
- (66) 『三国志』卷三〇・魏書三〇・烏丸鮮卑東夷伝第三
- 〇・東夷／夫余
- 殺人殉葬、多者百数。
- 『後漢書』東夷列伝第七五・夫余
- 殺人殉葬、多者以百数。
- (67) 『周礼』春官宗伯・冢人
- 凡有功者居前。以爵等為丘封之度與其樹数。
- (68) 『礼記』月令
- 飭喪紀、弁衣裳、審棺槨之薄厚、塋丘壟之大小、高卑、
厚薄之度、貴賤之等級。
- (69) 『後漢書』皇后紀第一〇上・明德馬皇后
- 初、太夫人葬、起墳微高、太后以為言、兄廖等即時減削。
- (70) 『潜夫論』卷三・浮侈
- 明帝時、桑民攢陽侯坐冢過制髡削。